

寒冷地形談話会通信

92年第 7号 92/12/05発行

事務局：東京学芸大学・地理学教室・小泉研究室
〒184 小金井市貫井北町4-1-1

1. 寒冷地形談話会20周年記念会の報告

前号で知らせた、寒冷地形談話会20周年記念会・『山の自然学入門』出版記念会は、11/**（土）に東大で行われ、多くの参加者を迎え、盛大に行われました。講演は小嶋 尚氏（明治大学）、中新田育子氏（東大・院）。山上会館で行われた懇親会も良いムードでした。講演要旨は以下の通りです。

◆小嶋 尚（明大） 「寒冷地形談話会の20年」

寒冷地形談話会が発足して20年が経った。談話会誕生のいきさつは雑誌「地理」1992年11月に、岩田さんが書いているが、その頃の周囲の状況を含めて若干の補足を加えながら、20年の歩みを簡単に記しておきたい。

当時はヒマラヤ登山の黄金期、国内も登山ブームだったが、海外調査は文部省の南極をはじめ、京大、東大、北大、都立大など特定の大学に限られていて、それらの成果が1960年代に入るとぼつぼつ出始めていた。しかし国内では、平野の地形発達史や海岸など低地の研究の全盛期で、戦前異常なまでに高揚した水河地形や山地の研究は、あまりやる人がなく、気候地形学、地生態学、¹⁴C年代測定やテフクロノロジーを利用した編年的研究など、新たに導入された概念や方法を応用する絶好の場が、山に広く残されていた。

1968年に科研費の特定研究「気候変化が水収支に及ぼす影響」（代表：渡辺 光）が始まり、気象、雪氷から北大・若浜五郎、名古屋大・樋口敬二、京大・中島鶴太郎、樋口明生などの諸氏が参加、地理では渡辺光、式、堀江、野上の諸氏に小嶋が加わった。この科研費グループは京都、東京、上高地で、大学院生、学生を含めた研究集会を行い、学際的交流が始まった。その後このグループは、ネパールヒマラヤ氷河学術調査団や琵琶湖ボーリング調査の核になり、さらにそこから枝分かれして、現在につながる多彩な活動を展開していくことになる。地理学会でも1968年に「気候地形学」のシンポジウムが行われた。

その頃、教育大では五百沢さんを中心に小野さん、小泉さんが活動しており、都立大の野上さん、平川さん、岩田さんも北海道で調査をしていた。私は野上さんと北海道で、岩田さんと明大の院生、学生諸君とは白馬岳で調査をしており、三者それぞれ付き合いがあった。そしてお互いに、山地や寒冷地の研究仲間が集まって、情報交換や成果を検討しあう場があれば良いかと、全く同時に同じことを考えていた。

そういう背景があって、1971年秋の鹿児島大での地理学会の折に、野上さんの提案で何人かの人に呼び掛けた。気候地形談話会にしてはどうかという意見もあったが、とりあえず山や寒冷地の地形に限ることにし、教育大グループの世話で、1971年秋に最初の集まりがもたれた。日時場所と出席者は次のとおり。

1971年11月13日（土）教育大W328教室、出席者：岩田、平川、野上、小嶋、清水（文健）、小泉、柳井、小野、五百沢（その時の出席名簿順）。9人中8人が大学院生だった。会の名称は乾燥地域の地形を乾燥地形というから、高山と極地、寒冷地全体を含めて「寒冷地形」とし、以前から何々談話会といった研究会があったので、それを後につけて「寒冷地形談話会」ときまった。会則なし、切手代を払えば誰でも会員、世話役は各大学回り持ち、など現在も続いている運営方針もその時に申し合わせた。

当初から学生主体で、学部学生が大学院生の調査の手伝いをし、大学院生が学生の卒論の面倒を見ることが続き、活気があった。そうしたなかで、現地調査法のノウハウを公開しながら意見を交換しあう場をもとうと、「夏の学校」ができた。その第1回は1972年に大雪山で行われ、北大の低温研グループが大勢参加し、雪氷の若手研究者との交流が始まる。第2回は白馬岳で実施し、それが契機になって、1974年「高山地形研究グループ」が結成され、白馬岳の共同調査が始まった。都立大の戸谷洋先生に代表をお願いして「高山の地形形成メカニズムの研究」のテーマで科研費をもらい、調査費の一部をそれでまかかった。鉢岳鞍部の避難小屋を本拠に周囲にテントを張って、皆で調査方法やアイデアを検討しあひながらの賑やかで楽しい調査で、成果は1978年に「白馬岳高山帯の地形と植生」としてまとめるとともに、卒論、修論を含めて多くの論文が生まれた。

1982年、日本地理学会の要請で、「寒冷地域の自然地理」のシンポジウムを実施し、成果を「寒

冷地域の自然環境」にまとめて出版した。その後、高山地形研究グループが一応の役割をおえた段階で、極地地形研究グループ（後に極地・高山研究グループ、に名称変更）が生まれ、1982-84年には地理学会の研究グループ、1988-90には同作業グループとして、寒冷地形談話会の枠を越えて活動することになった。その締めくくりとして1990年秋の地理学会で「極地と高山の地形」のシンポジウムを行い、地理学評論の特集号に成果がまとめられた。1990年には上高地自然史研究会が発足。1982年「山の自然学入門」出版、地理学会での発表数も最近では毎年10件を越え（図参照）、活動が続いている。

現在では、若い人が簡単に海外に行けるようになり、多くの大学院生が海外調査を経験するようになってきた。若い新鮮な目で日本の自然を再発見し、新しい考えを発展させていくことを期待したい。

（文責 小嶋）

2. 12月例会のお知らせ

（15:00から）

12月例会は12/19（土）に、明治大学大学院棟にて行います。発表者と演題は以下の通りです。

- ◆恩田裕一（名大・農）「水文地形学—地質による地形の差はなぜ生じるか」
- ◆関口辰夫（地理院）「全層雪崩発生斜面における筋状地形の地形的特徴」

また、年末ですので恒例のスライド大会も行いたいと思います。ネタを持ってらっしゃる方は、ぜひ持ってきてください。例会後は忘年会も予定しています。

3. 会費納入のお願い

会費の納入はお済みですか。引き続き受け付けていますのでまだの方はお早めにお願います。納入状況の照会などありましたら、往復ハガキで事務局までご連絡ください。

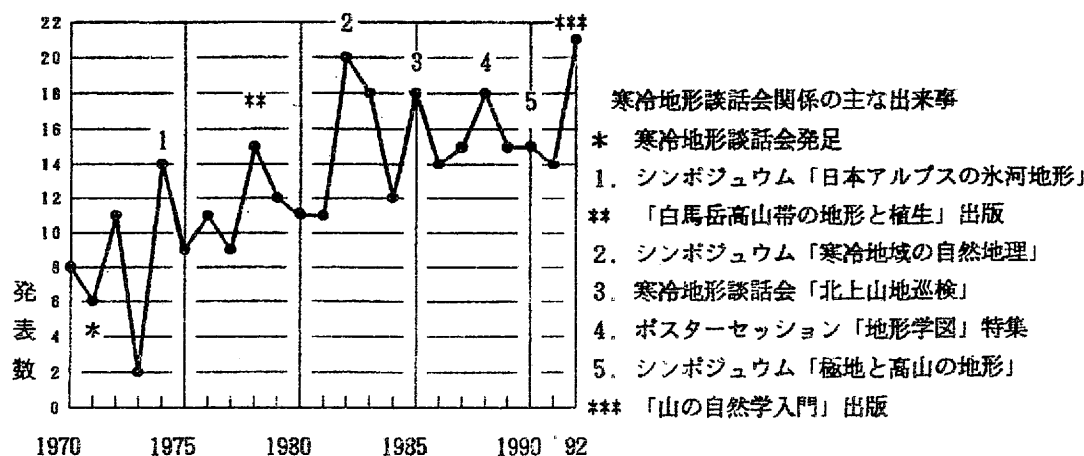
寒冷地形談話会 東京0-171342 1,500円/年

4. 古今書院からのお知らせ

前号でもお知らせした通り、『山の自然学入門』が会員の方は著者割引で購入できるようになりました。購入を希望なさる方は古今書院の関 秀明宛に会員であることを明記の上、ご注文ください。一般の書店で購入なされても割引特典はありませんのでよろしくお願いいたします。

非常によい売れ行きで、重版も近いという事です。又、この本を読まれて寒冷地形談話会に入会した方もいらっしゃいます。

また、自然科学に力を入れている書店、山の本が多い書店、本を多く置いている山道具屋など、本書に普及に役立つような情報がありましたら、同じく古今書院の関 秀明までご連絡ください。



日本地理学会における寒冷地形関係発表数の変遷（シンポジウムでの発表は除く）

（小嶋 原田）